

# 新型コロナウイルス禍のなかで

「世界を変えた10冊の本」池上彰著を読んで

下條村立図書館長 串原良彦

図書館内を何気なくひと回りする 9万冊を超える書籍の中を  
これだけの本を全部読んだらすごいもんだなと・・・

そんな中、新書コーナーなどで、ふと目に留まる本を見つけ出すのも楽しみ  
の一つである

世の中、新型コロナウイルスの感染拡大で、今迄に会ったことのない異常  
事態に見舞われている。それも無理がないことで、こんな感染症のパンデミック  
(世界的大流行)は100年に1度のことだという。

確かに学校の休校が2か月以上も続いたり、外出の自粛要請、飲食店の営業  
自粛が出たり、オリンピックの延期、プロ野球やJリーグサッカーの開幕延期、  
大相撲の本場所の中止、各地の夏祭りの中止など・・・それがいつまで続くか分  
からない なんてことが起こるとは・・・

そこで、何気なく目に留まった本を紹介しながら、いま起こっていることに  
思いを馳せてみたいと思います。



『世界を変えた10冊の本』  
池上彰著 文藝春秋 2011年

その本は、いま人気のジャーナリスト池上彰氏が約10年前に  
著した「世界を変えた10冊の本」という本です。1冊目にヒッ  
トラーによるユダヤ人迫害のなかで書かれた「**アンネの日記**」中  
東問題に大きな影響を与えている・2冊目に世界最大のベストセ  
ラー「**聖書**」・3冊目にイスラム教徒の聖典「**コーラン**」・4冊目  
に宗教と経済の意外な関係を分析「**プロテスタンティズムの倫理  
と資本主義の精神**」マックス・ウェーバー著・5冊目に経済  
格差、金融危機を予測していたカール・マルクス著の「**資  
本論**」・6冊目は「**イスラーム原理主義の『道しるべ』**」サ

イイド・クトゥブ著・7冊目は世界が環境問題に取り組むきっかけになった「**沈  
黙の春**」レイチェル・カーソン著・8冊目は生物の進化論を記した「**種の起源**」  
チャールズ・ダーウィン著・9冊目は経済不況を救う“処方箋”となった「**雇  
用、利子および貨幣の一般理論**」ジョン・M・ケインズ著・10冊目はリバタ  
リアニズム(自由至上主義)を唱えた「**資本主義と自由**」ミオルトン・フリー  
ドマン著

この10冊が池上彰さんが選んだ「世界を変えた10冊の本」ということで  
す。この解説書を読んだだけでも10冊の本の内容が少しは理解できますが、  
この10冊の本を全部読むことは、これまた大変なことである。

《裏面に続く》



そこで、コロナウイルス禍で世の中が混とんとしている中で、この10冊の中で、どの本に興味があったかというと、他の本に比べて全く知らなかった「沈黙の春」であった。

『自然は沈黙した。うす気味悪い。鳥たちは、どこに行ってしまったのか。みんな不思議に思い、不吉な予感におびえた。裏庭の餌箱は、からっぽだった。ああ鳥がいた、と思っても、死にかけていた。ぶるぶるからだをふるわせ、飛ぶこともできなかった。春がきたが、沈黙の春だった。』



こんな書き出しで始まるのが「沈黙の春」である。人間たちによって新しく作り出された化学物質、つまり農薬によって自然界は汚染され、やがて野生の生き物は死に絶え、春になっても生き物の声が聞こえない。「沈黙の春」がやって来るかも知れない、という問題提起の書であった。

『沈黙の春』レイチェル・カーソン著 新潮社  
「生と死の妙薬」(64年)を新装

この書を読んでいると、いま自分の廻りに起こっている小さな事が思いつく。ここ10年くらい前から、蚊が少なくなった・・田んぼの土手などによくいた地バチ(ヘイバチ)もほとんど見る事が出来なくなった。家の軒下や天井裏に巣を作ったり、ぶどうなど食い荒らして困ったキイロスズメバチも少なくなった。蛭はもちろんいなくなってしまった。そういえば、屋根裏を運動場にしていたネズミがこの頃いなくなった気がする。

しかし、わが家の近くでは朝になると燕が「ピーチクパーチク」賑やかだ。ウグイスの「ホーホケキョ」もホトトギスの「トッキョキョカキョク」も聞こえてくる『沈黙の春』にはなっていないのであるが・・・

気象関係では、異常な暖冬、雪が少なくなった。昔30年から40年前なら、陽に当たる田んぼに水を張ってスケート場を作ってゲタスケートで滑ったものだ、昼になると氷が解けだし、ミシミシと今にも氷が割れそうなところを滑るのもスリル満点で楽しかったものだが、今では薄い氷が少し張るだけだ。

それと雨の降り方が昔と違う、梅雨の雨といえばシトシトと1ヶ月くらい弱い雨が降り続いたものだが、今の雨は時雨量50ミリとか100ミリとかの雨がイッタンに降るようになり、大きな災害が起こるようになった。普段は何気なく、こんなもんだと思って、気に留めることなく生きていれば良かったのだが、新型コロナウイルス感染拡大によって、今迄の生活とは全く違った生活を強いられることになり、改めて人間の生きざまを見直すことが必要になってきたと思わざるを得ない。

この「沈黙の春」という本はそんな意味でも心にグッと突き刺さる1冊であった。10冊を読破すればよいのだが、池上彰さんの解説書を読んで、読んだことにとりあえずしておくことにした。それにしても一冊の本が世界に大きな影響を与えているという「すごい本」があることを改めて思い知らされたのである。